

第9章 九大で、出会って、挑戦して、成長して

農学研究院・助教 佐藤剛史

9.1) 九大にきて人生が変わった

9.1.1) 苦しんだ大学院生時代

総長表彰3回。

九州大学には、1万5千人以上の学生と、数千人以上の教職員がいますが、総長に3回も表彰された人間はそういないと思います。

では、私が優秀な九大生であったか、素晴らしい研究成果を上げている大学教員かというところと全くそんなことはありません。

大学入試では九大にも入れませんでした。実際に行った大学は、いわゆる「すべりどめ」で受験した福岡教育大学。そこで学部4年、大学院修士課程の2年を過ごしました。農業地理という分野で、環境保全型農業の勉強をしました。その間、大学4年時と修士2年時に受けた教員採用試験は、ことごとく失敗しました。

進路に迷っているところ、九大に出会いました。修士論文の研究内容が、当時の農学部農業経済学講座の横川洋教授の研究内容に近く、「やる気があるなら大学院博士課程の試験を受けてみないか」と誘われたのです。

試験を受けて合格し、なんとか九大の大学院生になれました。しかし、そこからが大変でした。同級生は、学部4年、修士2年の6年間も農業経済学を勉強しています。一方、私は、環境保全型農業という研究の対象が重なるとはいえ、農業経済学の知識はゼロ。ゼミに出て、同級生のディスカッションがほとんど理解できません。

本当に迷い、苦しみました。

そうしてもう一つ芽生えたのが、「自分が農業をしたことがないの

に、農業の論文を書いている」という、自己批判の意識です。

そこで週末の農家修行を決めました。金曜日の夕方まで大学で勉強して、それから高速道路で黒木町に行き、農作業を手伝い、夜は一緒に酒を飲みながら、いろんなことをいっぱい教えてもらう。月曜日の朝5時に起きて、高速を飛ばし、大学で勉強する。そして金曜日に再び、という1年間を過ごしました。

その農家では、大学では学べないことをたくさん教えて頂きました。働く意味とか、人生の喜びとか、環境へのまなざしとか、地域の大切さとか、家族のこととか。本当に大切なことばかりでした。

そこで学んだことをなんとか形に残したいと思いましたが、でもそうした内容は学会誌論文には適しません。そこで目に止まったのが、当時の日本育英会（現、日本学生支援機構）の論文コンテスト「チャレンジ21」でした。テーマは「地球環境」。このテーマであれば書ける、と思いました。

そうして数日で原稿を仕上げ、応募しました。入賞するなんて思っていませんでした。何とか、農家の皆さんに教えてもらったことを表現したい、その一心でした。しかし、そうして応募したことで私の人生が変わりました。

9.1.2) 人生を変えるきっかけ

応募から数ヶ月後、日本育英会の事務局から研究室に電話連絡がありました。その瞬間のことはよく覚えています。

その論文は、大学院生の部の最優秀賞をいただきました。なんと150万円もの賞金、副賞を頂きました。九大にも、その業績を評価して頂き、総長表彰を頂きました。それ以降も、論文コンテストに応募し、いくつかに入選しました。

そんな経験を経て思うことが一つあります。それは、「できる」と考えるか、「できない」と思うか、「意識さえしない」か、です。

例えば、「ヤンマー学生懸賞論文」。毎年、ある時期になると、全国

の大学で論文募集のポスターやビラが張り出されています。ちなみに現在の大学生数は、280万人。しかし、そのほとんどがポスターを意識さえしませんし、意識はしても「自分に関係ない」「自分にはできない」と思います。

ごく一部の学生が「書けるかも」と思い、その中でごく一部の学生が論文を書き上げ応募します。そうして集まる論文の数は100本にも達しません。そのうち18本が入選を果たすのです。100分の18です。意識して、できると思い、書いて投稿するだけで、入選の確率はここまで高まるのです。

学生にそんな話をすると「挑戦したい!」という学生が出てきます。そこで、私は「佐藤懸賞論文ゼミ」を開いています。学科、学部、学年を超えて受け入れています。他大学の学生もやってきます。これまで、5名の学生がそのゼミで論文を書いて挑戦し、うち4名の学生が入選しました。

第14回ヤンマー学生懸賞論文、福島健太郎(九州大学工学部3年)『小さな田んぼから見えてきたもの』優秀賞(30万円)。

第17回ヤンマー学生懸賞論文、森田朱音(九州大学大学院生物資源環境科学府修士2年)『みんなが幸せになるトレード-日本と世界、生産と消費のいい関係-』、特別優秀賞(50万円)。

第18回ヤンマー学生懸賞論文、澤みのり(福岡大学商学部4年)『みんな、食べる-食卓から始める農教育-』、大賞(100万円)。

第19回ヤンマー学生懸賞論文、澤口敬太(九州大学大学院生物資源環境科学府修士1年)『ペンはクワより強いのか』、大賞(100万円)。

意識する。できると思う。それだけで大学での可能性は無限に広がります。

9.2) NPO活動と九州大吟醸の誕生

9.2.1) 学生主導、新キャンパスの環境保全活動

大学院生時代の週末農家修行。そこでは、農業だけでなく、森づくりの方法も学びました。

ある日、九大のホームページを眺めていると、「新キャンパスの森林保全活動、ボランティア参加者募集」の文字が飛び込んできました。迷うことなく参加を決めました。森林保全活動なら自分の力が活かせるだろうと考えたのです。

九大新キャンパス(現、伊都キャンパス)では、その造成に伴い、生物多様性保全事業が実施されていました。生物を一種も絶滅させない、森林面積を減らさない、という目標のもと、高木移植、林床移植などが行われていたのです。総面積275haのうち100haは緑地として残されます。ボランティアによる森林保全活動は、その一環として九大が主催したものでした。

2001年7月22日、ボランティアによる森林保全活動が行われました。私もツナギを着て、マイ鋸のこぎりを持参し、張り切って参加しました。その場で大きな出会いがありました。理学研究院の矢原徹一教授です。矢原先生は、日本を代表する生態学者で、生物多様性保全事業の中心人物でした。

後に紹介するNPO法人環境創造舎の設立、九州大吟醸の実現等、あらゆる面で、矢原先生にはご理解とご支援を頂いています。今考えると、この日がなければ、この出会いがなければ、後の活動はあり得なかったと思います。

とはいえ、その日の保全活動の内容はひどいものでした。炎天下の下、安全管理が全くなされないうま、切った竹を黙々と運び出す作業が続けられました。竹を運び出す人のすぐ上では、チェーンソーで次々と竹が切り倒されていました。矢原先生も、後に、「けが人、死人が

出なくて本当によかった」と振り返っています。

「もう二度とこんな作業には参加しない」、私はそう思いました。その一方で、こんなことも考えました。「九大には、森林の専門家や先生はたくさんいるけど、楽しく安全にボランティア活動を企画、運営する力は、自分が一番あるんじゃないか」。

そこで、学生ボランティアによる新キャンパスの環境保全活動のアイデアを練りはじめました。学生が企画し、多くの学生に呼びかけて実施する新キャンパスの環境保全活動。単に作業するだけでなく、交流があり、学びもある活動。楽しく長続きする活動。

そして当時、矢原先生が開講していた少人数ゼミナール「九大新キャンパスにおける森と水辺の生物の保全」（1・2年生対象）の新旧受講生に呼びかけ、仲間を集めました。

活動をはじめるにあたって、最大の問題は活動資金でした。保全活動を行うには、鋸や鉋、ヘルメットなどの作業道具を買い揃える必要があります。

そこで、このアイデアをチャレンジ&クリエイションプロジェクト(C&C)に応募しました。C&Cとは、学生や大学院生が企画するユニークなプロジェクトをサポートする九大の全学事業です。選考の結果、50万円の助成を得ることができました。

そうして、2002年6月、学生ボランティアによる新キャンパスの環境保全活動をスタートさせました。

まず、ワークショップ形式で、九大新キャンパスの森をどのような姿にしたいか、皆で将来像を共有しました。そして、拡大する竹林を除伐したり、自然散策道を作りはじめました。

また、保全活動を行うだけでなく、活動を持続させる体制作りにも力を注ぎました。私も仲間もずっと九大にいるわけではなく、いつか九大を巣立っていきます。活動資金もそうです。初年度は幸運にもC&Cの助成を得ることができましたが、来年度はどうするか、目処は全くついていません。しかし、一度始めた環境保全活動は、長続きさせなければなりません。

仲間ですらいろいろと話し合った結果、NPO法人を立ち上げることにしました。NPO法人になったからといって、スタッフや活動資金が無条件に確保されるわけではありません。しかし、何もしないよりは、法人として責任のある仕事を行っていけば道が開けるはず、と考えたのです。

そして2003年2月、九大生による、九大新キャンパスの環境保全を行うNPO法人、環境創造舎が誕生しました。

学生ボランティアによる新キャンパスの環境保全活動をスタートさせたこと、学生でNPO法人を立ち上げたことなどが評価され、2002年度のC&C総長賞、最優秀賞を頂きました。

9.2.2) 九州大吟醸の誕生

2003年、私は農学部の助手になることができました。農業経済学の教員としての専門知識や経験は、まだまだ不十分だったはずですが。しかし、前述のような活動の成果を評価頂き、また、これからの可能性を期待して頂いたと解釈しています。

さて、2002年6月から活動を開始した環境創造舎は、以降、月1回以上のペースで、学生ボランティアによる新キャンパス環境保全活動を続けています。

活動をはじめればらくすると、ある悩みが生まれました。それは地元とのつながりが全くないことです。箱崎キャンパスからバスで新キャンパスに出向き、保全活動をして、バスに乗って帰ってきます。地元の人々と挨拶することもなく、新キャンパスの中だけ、学生だけの活動が約1年以上も続きました。

そんなとき、一本のメールが届きました。福岡市西区元岡で、明治3年から酒造りを続けている浜地酒造の常務理事・浜地浩充さんからでした。彼は、マスコミなどを通じて環境創造舎の活動を知り、「一度、酒でも飲みながら語りませんか」とスタッフを酒蔵に招いてくれたのです。2004年1月、私ははじめて元岡の集落に足を踏み入れました。

「酒は水が命ですよ」、杜氏が使う酒蔵の小さな部屋で浜地さんは切り出しました。小さい頃に裏山で遊んだ記憶、九州大学がやってくることによる開発への期待と農村景観を残したいという地元地域の本音、裏山が造成され酒造りに使う地下水に影響が出るのではないかという不安。

私にとって、地元の人の声を聞くのは初めてでした。

たっぷり話し合い、じっくりと酒を酌み交わし、「これから力を合わせましょう。おもしろおかしゅうやっていきましょう」と力強く約束しました。浜地酒造と環境創造舎の活動はつながっていると分かりました。酒は水から生まれ、水は森で育まれます。

その年2月の浜地酒造蔵開きではブースを設け、環境創造舎の紹介をさせて頂きました。浜地さんを窓口、元岡地区のデカタ（草刈りや水路掃除など地域の共同作業）に九大生が参加するようになりました。地域の子もたちを新キャンパスに招き、自然観察会を開催しました。学生が地域に飛び出していき、地域の人々がキャンパスに足を踏み入れるようになる。私が思い描いていた、地域とのつながりの姿が少しずつ実現し始めました。

そんな交流を重ねながら、あるアイデアを思いつきました。

浜地酒造で九大オリジナルの地酒を造ろう、そして、その売り上げの一部を、地域の環境保全活動費として活用しよう、というものです。「飲めば飲むほど緑が増える酒」です。

そうして「九州大吟醸」は誕生しました。よく、「九州大の吟醸ですか？九州の大吟醸ですか？」と聞かれますが、九州大の大吟醸です。九州大学ブランドマークがデザインされたボトルの中身は、酒米を40%にまで精米して吟醸造り。

九州大吟醸というネーミングとボトルのデザインは、芸術工学研究院の佐藤優教授によるものです。九大の特筆すべき研究成果である「味覚センサー」による、九州大吟醸の味の科学的分析も行いました。正真正銘、九州大の大吟醸です。

特徴は、他にもあります。企画会議から、具体的な仕込み作業や搾

り作業、販売プロモーションにまで、すべてのプロセスにおいて学生が携わっています。学生は、大学では学べない、酒造りという地域の伝統産業や技術、文化を学び、そしてモノを作り、それを買ってもらう喜びを実感しています。

それは、学生にとっても、教員である私にとっても本当に貴重な学びの場です。

9.2.3) 飲めば飲むほど緑が増える

九州大吟醸には『しづく搾り』(500ml、2,000円)と『手づくり』(500ml、1,200円)の2種類があり、1年目(2005年度)は、それぞれ2,000本と4,000本を準備しました。

日本酒の消費量は年々減少しています。コンパなどの場では、大学生も全く日本酒を口にしません。

そうした状況で、果たして九州大吟醸が売れるのかどうか、大きな不安はありました。しかし、しづく搾りは、発売後3ヶ月に、手づくりもその6ヶ月後には完売しました。

その結果、20万円もの環境保全活動費が蓄積されました。さて、次の課題は、これをどのように活用するかです。

浜地酒造の位置する元岡の集落と九大新キャンパスとの間には荒れ果てた森があります。もとは里山として利用されてきた森ですが、人の手が入らなくなり、竹が生い茂る鬱蒼とした森になってしまっています。

この森を、ヤマツツジの咲き乱れる里山に再生しようということになりました。関係としても、空間としても元岡と九大との間を豊かにしようと言うわけです。

以前、ヤマツツジはどこの里山にも多く見られたのですが、最近では里山が荒れ、その姿が見られなくなりました。九大新キャンパスの用地にも、数株が残る程度です。

その種を集め、苗を育て、竹を切り開いて、森に光を入れ、ヤマツ

ツジの苗を植樹します。それは地元の植物の苗で森を育てるという、新キャンパスの保全事業の考えに沿った計画です。

2005年の4月に種をまいたヤマツツジは、半年をかけて10cm弱の苗に育ち、2005年の10月30日、地元の小学生の手によって植樹されました。

2006年度は、元岡地区の田んぼを借り、九州大吟醸の原料となる酒米の田植えからスタートしました。これで、米づくりの段階から学生や教員がかかわったことになりました。

こうした活動が評価され、2007年5月の開学記念日に、総長より感謝状を頂きました。

2005年に初めて九州大吟醸を仕込んだ当時の1年生は、もう4年生になり、2008年の3月には卒業しました。3年前に植えた山ツツジは、2008年に初めて花芽をつけました。

「育つ祈念碑だ」と皆で思い描いた未来。いつか、この祈念碑が鮮やかな花を咲かせる頃には、それを植えた小学生たちは九州大学の学生となっているかもしれません。再生された里山の満開のヤマツツジのまわりに、皆が集まって九州大吟醸を酌み交わす、そんな未来ももうすぐ実現するはずです。

9.3) もっと地域と密接に、もっと地域のために

9.3.1) いとエコプロジェクト

今、大学として、大学教員として、よりいっそうの地域連携、地域貢献が求められています。

2007年11月、私は「いとエコプロジェクト」をスタートさせました。いとエコプロジェクトとは、糸島地域限定、オリジナルのエコバッグを作り、地域の人々に買ってもらうというプロジェクトです。エコバッグを使い、レジ袋を使わなければ、糸島から排出される二酸化炭素が削減されます。ゴミも減ります。ただ、そんな理念を掲げただ

けでは、絶対に売れません。広がりません。

デザインはとびっきりおしゃれにする。持っているだけで「カッコいい」「糸島を愛しているんだ」と思われるようなデザインです。

売り上げの一部で、糸島地域の小中学校へ「農業」「環境」「食」の本を寄贈します。子どもたちは、「エコバッグを使えば、図書館の本が増える」と知れば、積極的にエコバッグを使うでしょう。彼らが大人になる10年後は、糸島地域でエコバッグは当たり前になるかも知れません。「エコバッグを使おうよ」と子どもに訴えられれば、父兄や、地域の大人もレジ袋を使わなくなるようになるかもしれません。

そんな願いを込めての、いとエコプロジェクトでした。

1,000枚用意した糸島限定の糸島エコバッグは2ヶ月で売り切れしました。小中学校へは、約170冊の本を寄贈できました。

その取り組みは、多くのマスコミの注目を集めました。特に、朝日新聞は、今でもこのプロジェクトの行方を連載してくれています。メンバーも拡大しています。現在20名を超えるメンバーが、市や町という行政の枠組みを超え、市民や学生、行政職員という立場を超え、プロジェクトに参画してくれています。「フリーペーパーを作ろう」「読書感想文コンクールをやろう」という新しいアイデアも次々と生まれています。

私は、こうした取り組みが、糸島から全国に広がっていくことを願っています。

「次から次へと、よくそんなアイデアを思いつきますね」と言われます。

私の好きな言葉があります。「アイデアは、これまでのアイデアの組み合わせでしかない」。

いとエコプロジェクトは、まさに、これまでのアイデアと経験の組み合わせです。これまで、いろんな印刷物を作成する中で、エコバッグの作成、印刷ができる業者と知りあいました。売り上げの一部で、糸島地域の小中学校へ本を寄贈する、というしくみは九州大吟醸と同じ発想です。エコバッグのデザインは、後述する『ここ-食卓から始

まる生教育-』という本の出版の際に知り合ったデザイナーにお願いしました。プロジェクトのメンバーは、今まで糸島地域で一緒に仕事してきた市民、行政、学生、大学教職員に声をかけました。

私はよく学生にこう言っています。

自信を持って下さい。アイデアを生み出せるのは天才ではありません。人と出会い、経験し、その上で新しいアイデアを生み出そうと、自分の中に蓄積された経験を組み合わせることのできる人間です。それが意識できる人間です。

だからきっとアイデアは生み出せます。

9.3.2) 史上最強のご当地検定、伊都検定

「アイデアは、これまでのアイデアの組み合わせでしかない」と言えば、2008年3月に実施した「伊都検定」もそうです。伊都検定とは、九大の移転先である糸島地域の歴史や文化などに関する関心や知識を深めてもらおうという、いわゆるご当地検定です。

私は、2007年8月に、田んぼの多面的な役割や田んぼにすむ生き物に関する四択問題200問に挑戦する「田んぼ力検定」を九大で実施しました。遠くは、東京や三重県からも参加頂きました。検定、クイズという形で、多くの人に楽しく、農業の多面的機能について学んでもらえるということを実感しました。

ある日、前原市役所職員から、金がかからず、地域が盛り上がる新しい事業はないかと、相談を受けました。前述の田んぼ力検定の経験とノウハウがあったので、すぐに伊都検定を思いつきました。簡単な企画案を作り提案したところ、「面白そう！すぐに実施しよう」ということになりました。

そしてやるからには「史上最強のご当地検定」を目指すことにしました。5時間耐久の500問です。

四択500問の問題、解く方も大変ですが、作る方はもっと大変です。問題は、市民からも公募することにしました。感心してしまうような

糸島地域の歴史問題から、笑っちゃうようなトリビア問題まで、なんと700問以上の問題が集まりました。糸島地域の人々の、糸島を愛する意識と、その地理や歴史、文化に関する知識の深さに驚きました。

500問を厳選する作業も苦勞しました。その問題が問題として成立するのかどうか、答えが間違っていないか。何度も何度も、市役所の職員とチェックを重ねました。おかげで、私も、市役所の職員も本当に糸島地域に詳しくなりました。

2008年3月16日、37名の参加者が伊都検定に挑戦しました。参加者の多くが、糸島地域の深さ、面白さに驚いていました。「来年はもっと勉強して挑戦する」「自分でも問題を考える」と意気込んでいました。

ちょっとしたアイデアでスタートした伊都検定。やってみれば、予算ゼロ、3ヶ月という短時間で、地域住民も市役所の職員も、そして大学教員である私も、地域に詳しくなり、愛着と誇りが持てるようになりました。

現在、糸島地域では、九大と地域とが連携した様々なプロジェクトが進行しています。数千万円、数億円がつぎ込まれる大きなプロジェクトもあります。

一方で、こうした予算ゼロ、地域住民や行政職員、学生、大学教員の熱意とボランティアで成立している取り組みもあります。

大学が地域と連携し、地域に貢献していくためには、この両方がちゃんと機能していく必要があるでしょう。ただ、前者の場合は「カネがとれなければ動かない」、「カネの切れ目が縁の切れ目」となる場合も多くあります。だから、私は、後者の取り組みを意識的に行っています。

カネがなくてもやる。できる。

それは、私が、糸島地域、そこにすむ方々が大好きだからです。地域連携、地域貢献の基礎はそこにあると思っています。